



東アジア販路開拓レポート

海外販路開拓ツアー 「バンコク・ビエンチャン・ハノイ」

本年第一回目の海外販路開拓ツアー「バンコク・ビエンチャン・ハノイ」を3/25(日)～4/1(日)にわたり催行。今回は、羽田国際空港から福岡空港を経由してバンコク入りし、翌26日(月)、初めてビエンチャン(ラオス)を訪問した。

ラオスの首都ビエンチャンへ初訪問

タイやベトナム、カンボジアなどに囲まれ、海に面したエリアがないラオス。その首都であるビエンチャンの第一印象は、首都とは思えないほど人が少なく、近隣国に比べて開発が遅れているということだ。調べてみると、ラオスの全人口は約720万人(2016年)で、ビエンチャンの人口は82万人ほど。のんびりとした地方の田舎町といった風情である。

ビエンチャンの国際空港の規模は、米子空港(日本の地方空港)並みで、月曜日の午前10時頃に到着したが、街中には人があまりいない。コンビニなどは見あたらず、小さな売店が中心のようだ。オートバイが他のアセアン諸国に比べて少なく、ピックアップトラック(荷台付き小型車)をよく見かけた。ラオスはフランスの植民地だった時代もあるため、比較的ヨーロッパ人が多く、ヨーロッパ風のコテージ型プチホテルが多いという印象である。

26日(月)午後より、3年前にビエンチャンに進出したコールセンターを運営する日系企業とミーティング&懇親会。翌27日(火)は、ビエンチャン市内の商業施設(ビエンチャンセンター、アイテックモール)を視察した。残念ながら、他のアセアン諸国の先進国型モールとは程遠いレベルだが、日本テストを標榜する中国系の100円ショップや日本食レストランなどが進出していた(図1参照)。

午後から、ジェットロ・ビエンチャンにて、山田健一郎氏、高橋千怜氏よりラオスの経済状況と今後の展望についてブリーフィング。ラオスはメコン川を挟みタイと隣接しているため、経済的にその影響を大きく受けるという。タイやベトナムでは人件費が上昇しているため、自動車部品や精密機械などを扱う日系企業がラオスに工場移転するケースが増えている。他のアセアン諸国に比べて遅れているインフラ整備が進めば、若年層比率(25歳未満人口が全体の約60%)も高いことから、今後の経済成長に期待が持てそうだ。

今回、ラオス市場における可能性を探るため、4商品(女性用バッグ・植物ガーデニング用品・乾麺・サプリメント)を持参した。この中で山田氏が興味を示したのは、プロポリスのサプリメントだ。アセアン諸国においては、「健康は自分で守る」という考え方が定着しており、ラオスもまたしかり。食品や運動ビジネスには商機がありそうだ。また、ラオスではネットワーク系ビジネス(ニュースキン、アムウェイ)が盛んで、FacebookなどのSNSを活用した口コミ販促により、急激に売上を伸ばしていることが特筆すべき点である。



ラオスの首都ビエンチャンの街並み